対談：キース・ヴィンセント×上野千鶴子

コメント

上野千鶴子

私のコメントよりも，本当は中途で終わったキースのスピーチの続きをお聞きになりたかったでしょうが，キースの英文の論文が既に参加者の皆さんのお手元に配布されておりますので，お読みになったことを前提に，お話しいたします。

私は文学研究者ではなく社会学者です。なぜ社会学者がここにいるのか。文学研究者によれば社会学とは二流の文学研究の代名詞だそうです（笑）。その私がなぜここにいるかというと，日本でクィア・セオリーを牽引したパイオニアは英文学者の竹村和子さんですが，彼女がこの場にいればどんなによかっただろうと思いますのに，惜しくも亡くなられました。私は彼女の遺著を編集し解説した者として，和子の代理でここにいると思っています。それに加えて私は，セジウィックを翻案した『女ぎらい』という本を書きました。ミソジニーという言葉をワープロで漢字変換しますと，それまで「三十路に in her thirties」と変換されていたんですが，私の『女ぎらい』の本が売れたせいで，ミソジニーという言葉は日本語圏に普及いたしました。その功績を評価していただいたということでここにいると思います。

『こころ』というテクストは，日本人は誰でも知っているだろうとキースは言いますが，当たりです。なぜかというと，朝日新聞が復刻版を連載したからです。それというのも死後 50 年たって著作権がなくなり，自由に使ってよくなったからです。この新聞連載を朝日の読者はほぼ読んだはずです。読んでみた読後感は，昔いったん読んだはずなんですが，改めて非常に奇妙な小説だなと感じました。その話は後でいたしたいと思います。

今日キースはここで，パラノイド・リーディング，文脈還元主義というか，イデオロギー還元主義と，文学への愛を二項対立にしました。そしてその意味では，社会学者とはパラノイド・リーディングとして責められるべき文脈還元主義者であると思われますが，本当にそうでしょうか。いかなる思想史家であれ，評伝作家であれ，対象への愛を持たない者はいません。愛だけではなく，愛憎アンビバレンスだと思いますけれども，その点では私も社会学者として学生に常に言ってきたことは，自分の研究対象をまず愛すること，愛がなければ研究なんかできないとずっと言ってきました。このパラノイド・リーディングと文学への愛とは本当に二者択一なんだろうか，実は文脈とか解釈装置とは，自分が対象に持つ愛だけではうまく説明できない共感や違和感を言語化し，理論化してくれるような装置だと言うことはできないでしょうか。例えばセジウィックは，私たちにホモソーシャル，ホモフォビア，ミソジニーという概念セットをプレゼントしてくれましたし，同じようにサイードの『オリエンタリズム』や，あるいはスピヴァクの『サバルタン』という概念は，テクスト・リーディングのただ中からもたらされたもので，何もオリエンタリズムという概念が先にあってサイードの仕事が生まれたわけではないと思います。私は，スピヴァクとサイードがコロンビア大学で教えていたときに，所属す

るデパートメントが英文学部であることに驚愕しました。彼らは社会学者でもなく，国際関係研究者でもなく，文学研究者でした。徹底したテクスト・リーディングの中からこそ，あのような概念とか理論ツールが生まれて，それが私たちに贈り物として与えられたのです。それがいったん通常科学（ノーマル・サイエンス）になってしまうと，どこを切っても金太郎飴のような反復再生産が起きます。私はパラノイド・リーディングというものはノーマル・サイエンスの宿命だと思いますが，それが生まれたときにはそうではなかったと思います。そのような新しいリーディングをもたらしたものは，一体誰でしょうか。

私は，今日キースが言及しなかったこと，20世紀の文学理論の最も重要な達成の1つ，それはオーディエンス・セオリーだと思いますが，その読者論を持ち出さなかったことを奇妙に思います。読者が再読することによってテクストをその場で消費し再生産するという，読者のエイジェンシーを強調する新しい読み方，読者論をもたらしたのは，フェミニズム批評もまたその大きな貢献の1つでした。フェミニズム批評の理論家にエレイン・ショーウォルターという人がいます。彼女はフェミニズム批評を2種類に分けています。1つは狭い意味のフェミニスト・クリティシズム，もう一つはガイノクリティシズムです。フェミニスト・クリティシズムとは，それまでカノン canon だと思われていた男性文学に対するジェンダー批評，つまり男性バイアス批判です。ガイノクリティシズムとは，不当に貶められてきた女性文学の再評価をさします。

この2つをもう少しわかりやすい言葉でいうと，フェミニスト・クリティシズムというのは名作を駄作と言う権利の行使です。これをやってのけたのは，私自身も関係した『男流文学論』（富岡多恵子・上野千鶴子・小倉千加子著，筑摩書房，1991年）でした。改めてジェンダー視点から読んでみると，ノーベル賞作家の川端康成作『眠れる美女』はセクハラ小説ですし，吉行淳之介はミソジニー作家です。それから『テヘランでロリータを読む』という名作がありますが，ナボコフの『ロリータ』もチャイルド・セクシャル・アビューズ小説にほかなりません。他方，ガイノクリティシズムは，取るに足りないと思われていたものに魅了される権利と言いかえてもいいかと思います。これをやってのけたのは，例えば田辺聖子の吉屋信子論でした（『ゆめはるか吉屋信子 秋灯机の上の幾山河』朝日新聞社，1999年）。吉屋信子という，少女作家として文学史に埋もれていた作家の再読を通じて，再評価しました。同じようなことが，マンガ批評の分野で起きています。取るに足りないと思われていた漫画ですが，マンガ批評の確立によって，今，臆面もなく女性たちは，竹宮惠子や萩尾望都の作品が自分の人生を変えたと言うことができるようになりました。ですから，読者がテクストを再読することによってその場でテクストを新たに再生産するという読者論の立場から，何故キースが今日この場で漱石を取り上げたのかということを考えてみたいと思います。

漱石の再読という点で，『こころ』という小説がクィア・リーディングにふさわしいテクストだというのは多くの人が認めるところです。ルネ・ジラールのいう「三角形の欲望」モデルに最も適合しやすいテクストだからです。ただ，これまでは「先生」と「K」との関係がホモソーシャルで，かつホモエロティックな関係だと解釈されてきたわけですが，私が再読してみて奇妙な小説だなと思ったのは，本当にキースの本日の指摘どおり，「先生」と「K」との関係よりも，「私」と「先生」との関係のほうがはるかに intimate（インティメート）に描かれていたことです。「三角形の欲望」モデルでは，「私」についての視線が不在であったということがよくわかった

からです。そこにあらわれる「先生」の妻は――traffic in women，女の交易と言いますが，日本語では女の交換と訳されています――内面が全く描かれない客体として，描かれている典型的な easy to reread のテクストだということもわかりました。

それならそのような解釈につごうのよいな便利な例を選んだという言い方もできるのに，なぜ漱石に恋しているとキースは言うのか。なぜならば，漱石に恋していると言うのは，日本ではとても安全なことだからです。というのは，日本の近代文学研究における漱石の存在は，イギリス文学研究におけるシェイクスピアと同じような保守本流の位置にありますから。私は漱石に恋しているというほうが，もっと小物，例えば吉行淳之介に恋しているとか，ましてや女性作家，津島佑子に恋しているというよりもはるかに安全なことだからです。そこでは対象に付与される価値が，研究の価値を押し上げる効果があります。逆に言えば，対象が低い価値しか持たないときには研究の価値も押し下げられるということが起きます。私は日本文学研究の大学院生たちから，駆け込み訴えを受けるシェルターの役割を果たしてきました。例えば自分は日本の女性作家を扱いたいんだが，自分の指導教員である男性はそれに反対する。反対するときに，津島佑子を研究したいというと，「ああ，あれ，彼女は感心しないね」と言う。そういうとき，知らないなら「ボク，わかんないから，キミの好きにして」と一言言ってくれればいいのに，わからないとは言わず，ダメだというんです。文学として二流だという判定を下す，そういう男性の指導教員から逃れて，彼女たちは二流の文学研究者である社会学者のもとを緊急避難先として求めてきたのでした。

古典というものの価値を，時代を超えて読み継がれる，あるいは再読，三読に耐えるテクストだとすれば，キースは，プレゼンを省略した論文の最後のほうで，幾つかの作家の名前を並べています。夏目漱石と並んでヘンリー・ジェイムズ，それからジェーン・オースティン，紫式部です。それでは，何がこれらを古典にしているのでしょうか。本当にそれはテクストの力なのでしょうか。私にはとてもそうは思えません。なぜかというと，いかなるテクストも何らかの偶然のファクターの集積によって時代を超えて再生産されてきたからです。例えば『源氏物語』は本当にそんな古典でしょうか。『源氏物語』を国民文学の canon にしたのは，ある歴史的偶然でした。『源氏物語』は，江戸時代まではポルノまがいの婦女子のざれごとごときのものと思われてきました。それを国文学の canon に仕立て上げたのは，皆さんもご存じのとおり本居宣長で，それは何よりも漢学を排したい，国学を確立したいというナショナリズムのためでした。それは真名文字の文学(漢文学)に対して仮名文字の文学を打ち立てるためでしたから，『源氏物語』を再読することでそれを古典に押し上げたのは，本居というプロデューサーがいればこそ，でした。その後も，明治以降に現代語訳が次々に出るなど，さまざまな歴史的な偶然が重なることで初めて，『源氏物語』が今日のような日本文学の canon になっただろうと考えられます。

読者論の立場からすれば，何が本当に再読に耐えるのかというのは，決してテクストの力によるではなくて，読者の発見によるものだと私は思います。そういう意味で，クィア・リーディングもまた，そういう読者による再読を通じたテクストの再生産であるはずなのです。

クィア・リーディングのお手本のような読みをご紹介したいと思います。文芸批評家の斎藤美奈子という非常にブリリアントな女性がいます。彼女が「文庫解説を読む」という岩波書店

のPR誌『図書』での連載の中で，目の覚めるような再読をやっています。その中で彼女は，大橋洋一という英文学者が監訳した『ゲイ短編小説集』の解説を取り上げています。大橋は，オスカー・ワイルドのHappy Prince,『幸福な王子』はゲイ小説だと言っているんです。つまり爛熟する男性身体という，一つずつ宝石をついばめられていくあの幸福な王子と，それとツバメとの間にホモエロティシズムがあると，それはテクストから明らかだと言っているんです。なぜならば，爛熟する男性身体ほどゲイにとって萌えるものはないからという，とてもわかりやすい説明です。同じようにフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』もそう読めばゲイ小説だし，レイモンド・チャンドラーの『ロング・グッドバイ』もそうであるという，目の覚めるようなクィア・リーディングをやってのけています。残念ながら日本文学を対象にはしていませんが。こういうクィア・リーディングを，アカデミック・コミュニティーが育てた人材ではない書き手がやっている，アカデミックからそれが生まれていないのはどうしてでしょうか。

それだけでなく，後半でキースとの対談でやりとりしたいと思うんですけれども，斎藤さんのクィア・リーディングが大橋さんという英文学者の紹介したテクストに向けられているように，クィア・リーディングは日本では英文学畑には持ち込まれたが，日本文学者たちは大きな影響を受けていない，もしくはその影響を拒絶しているように見えるのはなぜでしょうか。

以上をキースの論文に対するコメントとした上で，最後に理論的な質問を1つしたいと思います。実はプレゼンで飛ばした最後のところで，キースは非常に重要な概念を出しています。「homosocial continuum」という概念です。私の問いは以下のとおりです。私もセジウィックに非常に大きな影響を受けましたが，クィア・リーディングというのは今のところ，斎藤美奈子のような女性の評論家によってすら，ほぼゲイ・リーディングと同義です。では，クィア・リーディングにジェンダー対称性はあるのか，が私の問いです。その際，「ホモソーシャル連続体」という概念は，一体何を意味するのでしょうか。既にレズビアン・スタディーズの中には，エイドリアン・リッチの「レズビアン連続体」という概念があります。もし「レズビアン連続体」に対応する男性版をつくるとするなら，それは「ホモエロティック連続体」でなければならないはずなのに，なぜキースはこれを「ホモエロティック連続体」にせず，「ホモソーシャル連続体」にしたのか。このジェンダー非対称性は何を意味するのでしょうか。

『女ぎらい』を出して以来，私はいろんな人から「メイル・ホモソーシャリティ」があるなら，「フィメイル・ホモソーシャリティ」もあるのかとよく聞かれます。これに「イエス」と答える人もいます。セジウィック自身は「イエス」と答えていますが，その具体例を挙げていません。私の答は「ノー」です。なぜかというと，もしホモソーシャリティというものがホモフォビアとミソジニーと，3点セットであると考えれば，その女性版はフィメイル・ホモソーシャリティとレズビアン・フォビア，そしてマン・ヘイティングの3点セットでなければならないからです。にもかかわらず実際にはそうなっていません。レズビアン連続体は成り立つのに，なぜホモエロティック連続体は成り立たず，ホモソーシャルとホモエロティックの間にホモフォビアという切断が入らなければならないのかということは，この概念がジェンダー非対称であることの論理的な根拠となります。

もう一つの答は，「フィメイル・ホモソーシャリティ」が成り立たない理由は，ホモソーシャ

リティとはエンタイトルメント（資格付与）に関係するからです。その資格とは，男性集団の集団利益という社会的資源の配分の権利のことです。女性にそのような集団利益があるかというと，そもそも女性とは社会的資源を不利に配分された集団のことですから，女性集団に資格付与されることのメリットがありません。また「メイル・ホモソーシャリティ」は価値付与が富や権力という一元的な尺度で成り立っていますのに対し，「フィメイル・ホモソーシャリティ」の場合には，女性集団の中での価値付与と男性による価値付与とが二元的になっており，その尺度がしばしば一致しないという問題があります。ですから，女子文化というのは決して「メイル･ホモソーシャリティ」から自立できない，それに寄生して生きるという二面性があります。こういうジェンダー非対称性がある限り，「フィメイル・ホモソーシャリティ」は成り立たないというのが私の説です。もう一つの理由は，「メイル・ホモソーシャリティ」が配分するような資源を「フィメイル・ホモソーシャリティ」は持たないという，これもジェンダー非対称性に求められます。男性のホモソーシャリティが配分する資源こそ traffic in women，つまり交換の対象としての女です。そのようなものとしての資源が，女性の側にあるかというと，女は資源としての客体にすぎません。威信，財，権力，地位などの全てが「メイル･ホモソーシャリティ」の集団の中で配分される資源であり，女性の配分はそれに伴う成果にほかなりません。男性集団の中で配分される資源に当たるような自立した資源を，「フィメイル・ホモソーシャリティ」が集団利益として持つことは考えられません。今のところ女性が理論的にも実践的にも社会的資源にアクセスするパスは，男とのつながりを通してでしかなく，それに与えられるエンタイトルメントが妻という地位であるということは今でも変わっていません。なので，今のところ女性の間で男性集団から独立して配分されるような財を想像することができないという点では，私は「フィメイル・ホモソーシャリティ」が「メイル・ホモソーシャリティ」のカウンターパートになるような形で存在しうるとは思えなません。

このような強力なジェンダー非対称性がある中で，クィア・リーディングのレズビアン・バージョンはいかに成り立つのか。クィア・リーディングは今のところほとんどゲイ・リーディングと同じで，今日のキースのパフォーマンスもそうでした。それなら，そのレズビアン･バージョンを一体誰がどのように見せてくれるのだろうかを期待して，私のコメントを終わります。

ありがとうございました。（拍手）

対談

キース・ヴィンセント，上野千鶴子
（司会）中川成美

○中川　それでは，これから対談に入りたいと思います。

ただいま，キース・ヴィンセントさんの基調講演及び上野さんのディスカッサントによる問題提起という形で進行しましたが，これからヴィンセントさんと上野さんの対談に入りたいと思います。なお，この会議は日本語，英語双方でやりますが，その際に通訳は入れません。例えばご質問を英語でして，日本語で答えるというようなケースも出てくるかと思います。

それから，もう一つ大きな点は紙媒体のハンドアウトはございません。明日，一部だけは用意いたしますけれども，基本的にはDropboxの中に入っております。HTTPは受付に用意しておりますので，端末をお持ちの方はそこからアクセスしてください。なお，まだ全部未発表のものでございますので，サイテーションに関しては十分お気をつけいただきたいと思います。

時間の関係で，大変キースに，気を使っていただいて，最後のところをはしょってしまったわけなんですけれども。まず，上野さんからの4つの質問が出ました。1つは読者論として，読者のエイジェンシーの問題をどうするか。それから，例えば日本における少女小説とかBLとか，それからアニメーションであるとか，映像も含めて，そうしたものとのアクセスはどうだろうか。それから，アカデミックから，こうしたクィア・リーディングの可能性を示していくような研究，あるいは研究者が出ないのはなぜか。それから4番目として，これが一番大きい問題となりますけれども，ホモソーシャル・コンティニアムという，概念としては成立するかもしれないけれども，例えばそこでメール・コンティニアム，あるいはフィメール・コンティニアムとして自立し得るような理論が出てくるか。それは今，上野さんがご説明になったように大変困難な状況ではないかというご質問だったと思います。そこのところからちょっと少しずつレスポンスしていただく形でよろしくお願いします。

○**ヴィンセント**　上野さん，とてもおもしろい指摘をしてくださってありがとうございました。

確かにおっしゃるとおり私の話はある意味でポイントを強調するためにポリティカルにしました。まず読者論の問題から始めたいんですけれども，私はもちろん読者は大切だと思います。例えば，話の中でも，「新・こころ」の中の藤原は1人の読者ですね。彼が自分の読みを，先生がそれを拒否しているのに，自分がそれを主張するわけですね。小森も1人の読者であるし，それこそ全ての人たちは読者。私が思うのは，やっぱり読者の中の区別をしない，区別というか，区別はもちろんあるんだけれども，余り上下関係ではなくて，先生であったりとか学生であったりファンであったりとか，その全ての読者の読みを大切にすることが，まさに私のポイントの1つだと思ったんですけれども。ただ，作品も重要だと思います。私が思うには，アカデミックのトレンドがあるんですけれども，読者を強調する，読者を尊重する余りに，私たちが作品の中に内在する力を見落としているように私は思います。だから，バランスが必要だと思います。しかも，二項対立ではないと思います。両方の，読者も，作品も，あと作家も，それぞれのそういう主体性があって，それを交渉し合う，話し合う場というのが文学だと私は思います。

あと一つは，オリエンタリズム，ホモ・ソーシャリティといった，贈り物の話。それは確かに文学のテキストから，サイードもそうだし，それはとてもおもしろいご指摘ですけれども，もちろんそれは文学のテキストから来ている，あるいは文学テキストを読むことで，サイードとかセジウィックとかがそれを取り出して私たちにくれている，それをもって私たちがノーマル・サイエンスができるというのは確かにそうなんですけれども，私が言おうとしているのは，もうそれは10年，20年前のことで，じゃ今は次の何かが必要で，ホモ・ソーシャリティ，別に何でもいいんですけれども，そういうのを言い続けて，同じような道具を使って同じようにテキストを分析，何回も何回もするというパターンになってしまっているような気がしますね。だから，私たちが，サイードとセジウィックがやったように，テキスト自身，作品自身に戻って，また新しい理論的な武装を見出す時期が来ているのではないか，パラダイムシフトのときが，

それが必要なんじゃないかと私は思います。

最後に１つ，余り時間がないですけれども，漱石を愛するのは簡単だと。確かに一番簡単なんですね，本当に。シェイクスピアを愛するのと。それはでも，ホモソーシャル的に愛するのは簡単だと思うんですけれども，恋しちゃうのはちょっと違うと思います。性的に本当に興奮する，それがちょっとやばくなるわけですよ。だから私はこの発表を書いたときにやっぱりすごく恥ずかしかった，こんなことをみんなの前で言えるか，本当に。それでもっと長いの，それは長過ぎて，今でも長過ぎたんだけれども，それを言うのは恥ずかしかったんで，その恥ずかしさは何だと考えたかったんですね。だからちょっと皮肉というか，確信持ってやったというか。それで，例えば漱石が１つの，シェイクスピアのようにとか，いわゆるハイカルチャーの，彼のところで安心して勉強できるというようなあれだったら，それはやっぱりホモソーシャルな愛しかたで，それこそ男たちの家父長的な世界なんですけれども，でも，漱石におけるクィアな要素を見出して，漱石にそのために，恋しちゃうというのは，それは違うんじゃないかと，一応そういうふうに，それを考えるためにこれを書いたんですけれども。答えは今でもわからないんですけれど，その違いを考えたかったんですね。ホモソーシャル的に作家を愛すること，それはもちろん，canon にどっぷりつかることなんですけれども，私が言おうとしていることはちがいます。

あとは読者論のところで，名作を駄作と言う，名作じゃないものに魅了される権利という，その２つの読者論というか，フェミニスト的な考え方でいうとそれがありますけれども，もう一つは，やっぱり名作をクィアに愛する，その中に今まで誰も見なかったところを見出す可能性もあって，それを，私が漱石をやっているのは，やっぱり彼は canon のど真ん中にいるからこそ，彼をクィア化する価値があると思うからです。もちろんもっと，余り読まれていない作家におもしろいクィア的な要素が幾らでもあると思いますけれども，それを言っても誰も驚かない。もちろんそれをする価値はある，別にそれを否定しているわけではないんですけれども，戦略として私は canon のど真ん中の作家をあえて選んでクィア化しようとしている。それはセジウィックがやった，一応彼女からそれを学んだんですけれども，彼女はヘンリー・ジェイムズとかマルセル・プルーストとか，そういう非常に canon 的な男性作家を，それこそメルヴィルとかをクィア化しようとしている。上野さんがおっしゃった斎藤美奈子も同じようなことをしているようですが。一応そういうつもりで私は漱石をクィア化しようと思っているわけです。

最後にホモ・ソーシャリティ，それは難しい大きい問題なんですけれども，もちろん対称性がない，それはセジウィックも『Between Men』で最初から言っていることで，男性，ホモソーシャル・コンティニアムには断絶がある，ただ女性のほうにはない。ただ，おもしろいのは，最近はもしかしたらそれが変わってきていると思います。男性，ホモソーシャル・コンティニアムの断絶がなくなりつつある。ホモナショナリズムという時代になって，日本は別かもしれないけれども，アメリカではゲイ結婚ができて，ゲイが本当にノーマライズされる中では，ホモソーシャル･コンティニアムが，継続性がまた出てきている。だからそれをまた考え直さなきゃいけないと思います。

○**上野**　「ホモソーシャル・コンティニアム」という概念のかわりに，「レズビアン・コンティニアム」の男性版の概念をつくるとしたら，「ホモエロティック･コンティニアム」になるんじゃ

ないですか。

○**ヴィンセント**　でも断絶があるときは，僕はただその場合はセジウィックの言葉を使っていると思いますけれども，ホモソーシャル･コンティニアムで。もちろん片一方はエロティックで，片一方はソーシャルというか，なんだけれども。

○**中川**　だから，そこに断絶を見出すということにもやっぱり少し疑問を付さなきゃいけないということですか。

○**ヴィンセント**　うん，そうです。それがもう，その状況が変わってきている。

○**中川**　状況が変わってきている。

○**ヴィンセント**　セジウィックが80年代に書いた，明らかに断絶があるという，その状態が最近変わってきていると思います。

○**中川**　なくはないけれども，確かに一番今大きい問題は，世界的にゲイの結婚の問題があって，でも結局，国家的なさまざまな役割の中に回収されるんじゃないかという危機感はあって，それはキースなんかは前から批判していることの1つですけれども，それをちょっと考えていくと，この問題については新たに考え直しができるかもしれないということです。しかし，ただ，確かに上野さんがおっしゃるとおり，レズビアン・ホモソーシャリティというのを形式的に夢想すると，余り具体的な形としては，それはさまざまな形の可能性はあると思うんですけれども，ゲイで今見えているものとは，やっぱりちょっと違うような気もなきにしもあらずですね，確かに。

○**上野**　成り立たない。

○**中川**　成り立たない。全く成り立たない。

○**上野**　はい。

○**ヴィンセント**　それは日本で……。

○**中川**　日本ってこと？　（上野氏の応答を受けて）世界的。

○**上野**　今のリプライを聞いて，最初の3つはほぼ同じことのくり返しですね。読者も大事だけれども，作家もテクストも大事って。はい，そのとおりです。

　いったんパラダイムシフトが起きて，それがノーマル・サイエンス化すれば陳腐化はあっという間に起きます。全くそのとおりで，みんな飽きてきたというのはそのとおりですが，その意味で再び漱石という日本国民文学のcanonを対象にしてクィア・リーディングを試みたのは戦略的に正しいでしょう。最近，キース・ヴィンセントさんは大変戦略的に振る舞っておられるようで，そのストラテジーは正しいと思いますが，それは同時にcanonの再生産に結果として貢献するということでもあります。私たちは全く同じ批判を『男流文学論』で受けました。Canonへの挑戦は一方で対抗でもあるが，他方でcanonの再生産にも寄与してしまうという両義的な効果があるということは言えると思います。

○**中川**　ちょっと時間の関係で少し先へ進みたいんですけれども，この対談に関しまして，私どもで一応メールを通じまして討議したんですけれども，そこで幾つか非常に大きな問題が提示されてきました。ちょっとそこの問題からやっていきましょうか。

　では，キースのほうからお願いします。

○**ヴィンセント**　これは幾つか提起していきたい点なんですけれども，1つは，私の印象では，

会議の call for papers でも書いていましたけれども，やっぱり日本でクィア・スタディーズは社会学のほうが強い。文学，特に日本文学の分野では余り発達していない。それはおもしろいことにアメリカの場合と逆で，アメリカの場合はクィア・セオリーは文学という畑から出てきているわけですね。セジウィックも，お話ししたD・A・ミラーも，マイケル・ウォーナーもローレン・バーラントもみんな文学の教授で，なぜかそれは日本と逆なんです。それはなぜかということを最初に上野さんに聞きたかったんですけれども，なぜ日本で社会学のほうでクィア・スタディーズがこんなに盛んになって，文学があまり……。

○**上野**　もうキースさんご自身が答えをご存じだと思いますが，とてもシンプルに答えられます。1つは，日本文学研究者における理論フォビア，2つ目は日本文学研究者が横文字を読まないこと，その2つです。

クィア・セオリーは，日本の英文学研究の中には強力に入ってきていますが，日本文学には頑強な言語障壁があって入れない。社会学というのはなりふり構わぬ成り上がりの学問ですので，隣接分野のありとあらゆる理論を全て借用して流用するというところですから，文学からも借用するし，ほかのところからも借用します。そうやって理論をどんどん使って陳腐化していくという役割を果たしているので，理論の普及と大衆化の役割を社会学者がやっているということでしょう。キースの答えもたぶん同じですか。

○**ヴィンセント**　そうです，一緒。

○**上野**　横文字を読む日本文学研究者，あるいは参考文献の中に外国語の文献を入れる日本文学研究者は嫌われますよね。

○**ヴィンセント**　これはその続きになるかもしれませんけれども，例えばイヴ・セジウィックという1人のフィギアを例にとれば，彼女の初期の作品，『Between Men』と『Epistemology of the closet／クローゼットの認識論』は日本語に訳されて，とても大きな影響を与えたと思いますけれども，それ以降の彼女の作品は全然訳されていないんですね。私は，それはもうクィア・セオリー自体が流行らなくなったからか，それか後のほうの作品はもっとこてこての文学に焦点を合わせたものだからか，それかパラノイド・リーディングをやめたから……。

○**上野**　セジウィックの翻訳書でも，『クローゼットの認識論』は日本の読者にまだわかるんですが，『Between Men』は，具体的に19世紀のイギリス文学のテクストが出てくると，何を論じているのかということそのものが，ほとんどわからないでしょう。テクストの共有がないので。翻訳されていない文学テクストを読んで，セジウィックの研究をやっている人は英文学者にはいます。でも，それは英文学から越境しません。私は日本の文学研究者が文学という狭い領域に立てこもっているなと思うのは，セジウィックもサイードももともと文学研究者なのに，徹底したテクスト・リーディングの中からセオリーを生み出している。というふうなことを，日本の文学研究者はあまりやらない。テクスト・リーディングの中から文明批評に至るようなスケールの大きい仕事をする日本の文学研究者は，いないわけではないけれども，極めて例外的なのはどうしてなんでしょうか。もう一つは文学研究の対象となるテクストが日本ではフィクションとかノベルとかに非常に限定されていて，拡がりを持たないことです。1つ私が挙げたい例は，つい最近の出版事業の中で非常にすぐれた仕事の1つに，集英社が出した『戦争×文学』という全20巻のコレクションがあるんですが，そこに，成田龍一という歴史学者が編者に入っ

ています。ところが徹底して採用されているのはフィクションばかりなんです。サイードの『オリエンタリズム』に使われているのはフローベールの紀行文ですが，紀行文とか日記とか，手紙とか評論とかいうテクストが全部『戦争×文学』からは排除されている。私だったら「敗戦と文学」の巻には，山田風太朗の敗戦日記とか，永井荷風の日記とかを入れたいし，戦後の丸山眞男の『超国家主義の論理と心理』のような社会科学のテクストも入れたいですね。先行研究は英語では existing literature といいます。つまり書かれたテクストの集合のことなんです。なぜそういう発想，つまり徹底したテクスト・リーディングの対象となるべきテクストの集合から，文学者はフィクション以外のものを排除するのかがとても残念です。日本の文学者はなぜこんなに狭い意味の文学の中に立てこもっているのかについては，中川さんに答えていただきましょうか。

○**中川**　確かに今，上野さんおっしゃったとおりで，今度の『戦争×文学』，集英社，これ画期的なんですね，この『戦争×文学』全集。今，本が売れない状態の中で集英社の英断だと思います。しかしながら，やはり私も同じ感想を持っておりまして，実は1960年代に同じ集英社から『昭和戦争文学全集』全15巻別巻1巻が出ていますね。これは，今，上野さんがご指摘になったとおりで，吉田満であるとか，それからもう本当に名もない兵士たちの記録であるとか，それがはいっています。この間，12月8日のことで，私は京都新聞で対談したんですけれども，そのときに編集の方が持ってきたのが，この昭和戦争文学全集の「12月8日」という巻だったわけです。そこにはもちろん太宰や安吾やいろんなもの入っているんですけれども，そのほかに数多ある，戦争詩であるとか，恐らく消えてしまうテキストを極力集めております。ただ少し，『戦争×文学』の援護をしますと，テキストの大部分がやはり失われていっている，今の時代に再読するに当たって，いろいろな条件の不備があるということは言えるかと思います。やはり，そういう点を含めて考えていきますと，私たちがテキストを決定するという行為は，とても重要であると同時に難しいということになります。

先ほどの上野さんのなぜ漱石かという問題ともつながるし，そういうようなメイン・カノンであるからこそ，読みかえが必要だということもある。また同時に，失われてしまったテキストをどういうふうに発掘していくかということも残ります。例えばキースさんのご著書の中に，浜尾四郎という作家が入っているんですけれども，この人も今はほとんど誰も知らない――濱尾実，元東宮侍従長の叔父にあたる人ですが――。この人が非常にホモエロティックな小説を書いていますが，そうしたものは現在簡単には読めなくなっているというようなこともあります。

○**ヴィンセント**　少しコメントすると，私の講演の中で虚構と現実の境目を問題にすることは，非常に私，それには関心を持っていますけれども，やっぱりフィクションはフィクションで現実は現実だと，余りにそれを主張すると，それにいろんなほかの問題が付随すると思いますね。だから基本的に，劇の中の先生のように，これはフィクションだよと，だからあなたに関係ない，あなたはそれに対してそれほど感情的な反応をする必要はない，フィクションだから，それは漱石の筆の力だと言っているのは文学の先生なんです。それはどんなにひどい状態かと読んで思ったんですけれども。だからやっぱり上野さんがおっしゃっているようにノンフィクションとフィクション――テキストというのは世の中に影響，というか行為をする，それはフィクショ

ンであってもノンフィクションであっても私たちに働きかける，そのメカニズムを考えてそれを分析することが私たちテキストを扱っている学者の仕事だと私は思います。フィクションじゃなくても。

ではこのことに関わってもう一つ，5番目に，クィア・リーディングはほかのディシプリンにどう当てはめるかということについて。クィア・リーディングは，私の講演の中で1つのやり方のクィア･リーディングを提案しましたけれども，もちろんそれはそれだけなわけじゃなくて，あとは文学だけじゃないクィア・リーディングが応用できる分野というのはほかにもあるはずで，例えば歴史学とか社会学，上野さんに聞きたかったんですけれども，例えばクィア･リーディングがどのようなほかの分野で応用できるか。

○**上野**　私は，クィア・リーディングにもっともふさわしい豊かなフィールドは，日本のBLノベルと少女漫画の世界だと思っています。あのテクストの中から，そして，二次創作でカップリングをするというテクスト消費の仕方から，腐女子カルチャーが生まれ，それが今，クィア・リーディングの大きなリッチフィールドになっていますが，ここから目の覚めるような研究が出てきてほしいとぞくぞくしながら待っているんです。私が知らないだけかもしれないので，もし皆さん方の中でご存じだったら教えてほしいぐらいですが。

私は，腐女子文化というか日本のBL物というのは，日本の性別隔離文化の産物だと思っています。ジェンダー文化には，一方に強制異性愛規範が支配している西欧のようなカップルカルチャーと，他方にムスリム圏のように性別隔離が支配的な文化があって，両者は文化的に違うと思うんですが，腐女子カルチャーは後者のその産物だと思っています。そういう意味では，日本の腐女子カルチャーが，性別隔離の強い文化圏，まずアジア圏に対する文化輸出物として非常に大きな影響力を持ったのは当然でしょうし，もっと潜在的なポテンシャルとして，アジア圏以上に強い性別隔離のもとにあるイスラム文化圏に対する輸出コンテンツとして強力な商品価値を持っていると思っています。腐女子カルチャーをイスラム圏に輸出したら日本はきっと金もうけができるだろうという私の仮説を，誰かに証明してほしいと思っているんですけれどもね。こういう沃野が目の前に広がっているのに，どうして文学研究者はそこから研究成果をくみ上げないのか。それにアニメーションもありますね。

○**中川**　少し会場に戻してよろしいですか。会場の皆様，いかがでしょうか？

○**ベルント**　すみません，京都精華大学のジャクリーヌ・ベルントと申します。よろしくお願いします。

先ほどヴィンセント先生のお話を聞いて，漱石を恋するということは腐女子的な読みと一体どこで違うのだろうかと思っていたんです。それが第1の質問になります。

つまり，それは上野先生の一番最後のポイントとつながればいいなと思っております。つまり，なぜクィア・リーディングとしてのBLに対する本当におもしろい研究が生まれてこないのかという点なんですが，もしかしたらその理由の1つは余りにも情動的なアプローチにあるかもしれません。つまり，今日ヴィンセント先生が紹介してくれた感動的な読みとか恋するような読みなどが，一体どれほど新しいタイプの批評，あるいは新しいタイプの学術研究とつながるかは，かなり私たちの職業的な畑にとっては大きな問題になるのではないかと思います。つまり，余りにもアフェクティブな情動論的，情動的な，情動論でもないですね，情動的な読みを優先し

てしまいますと，どうやって観念批評に陥らないような新しいタイプのテキスト分析が成り立つのか，どうやって新しいタイプの美学が成り立つのかと不思議に思っております。

○**中川**　ありがとうございます。では今，漫画研究とかの中で，ちょっと画期的なBL論とかそういうのはまだ出ていないということですか，やっぱり。

○**ベルント**　余りにも社会学系の――ごめんなさいね，上野さん――今日ヴィンセント先生がおっしゃったことは，まさにアニメ研究，漫画研究に当てはまります。つまり，私たちに今必要なのは徹底的なテキスト分析です。しかし観念批評で――アレクサに反論されちゃうと思います――あるいは広い意味での感性論的な美学的なテキスト分析が確かに求められていますね。つまり，社会科学者たちは何でもかんでも奪ってしまおう――ちがいますね。率直に言えば。それは世界的なジャパニーズ・スタディーズにも当てはまるのではないかと思います。最初のところでトポロジーとかソシオロジーを見れば，例えば漫画を取り上げると，物語論をやっても，ナラトロジーをやってもカジュアルトロジーに分類されてしまう。

○**中川**　カリカチュアされてしまう。

○**ベルント**　国際会議の場で。

でも，例えばBLとか腐女子的な読みに対するあの関心は，主に社会科学的な動機に裏づけられているような気がします。それは一方ではファン自身，あるいはファンダムから生まれてくる若手研究者の動機なんですね。他方では，既存の学術分野がそれに対応できない。つまり，例えばヴィンセント先生がおっしゃったような長時間的な筆の力，長時間的な魅力というのが，canon的な，いわゆる高尚文学的な作品には当てはまるかもしれません，ある程度までは。そういう美的な力が。しかし，例えば一時的なメディアとして働いているような漫画，アニメなどには，こういう古く見えるような自律，美学を適応できないのではないかと思われますね。一方では……

○**中川**　よろしい，ちょっとすみません。

○**ベルント**　ごめんなさい。

○**上野**　ちょっと社会学を弁護しておくと，社会学の中でも文学的関心を持った人たちが，文学研究ではできないことを社会学というブラックボックスの中でやっているとも言えます。社会学はカテゴリーのごみ捨て箱ですので，カテゴリーを濫用，酷使するフィールドですから，文学的関心を持ちながら文学研究でできないことをやるための隠れみのに使うという，一種のシェルター機能を果たしているところがあるかもしれませんね。

○**ヴィンセント**　それはとてもおもしろいですけれども，ちょっと次の質問に移りたいです。

パラノイド・リーディングというか，パラノイド・リーディングから離れていくと，私の講演で私がそうやっていると思いますし，あとそれは1つの大きな動向であると思いますが，それを1つの脱政治化，というか政治を去る動きとして受け取られがちだか，もしかしたらもっと効果的なやり方で政治的に読むことが，パラノイドじゃない方法でできるかということについて，考えたいし，上野さんに聞きたいんですけれども，例えば研究者としてもっと例えば，世界を救うんじゃなくて，もっと謙虚な態度でできることをする，小さな読みをして。何か例えば実証的な研究を少しずつやって，テキストとつき合って小さな気づきを得るという謙虚な態度というのは政治的にどう評価する。

○**上野**　キースが問題提起した，ネオリベラリズムの中でいろんな研究が脱政治化しているんじゃないか，一方で，自由度が高まるように見えながら，それは私的な自由の高まりじゃないかという指摘は日本にもあてはまります。特に 3.11 以後の日本は，2012 年の総選挙と，2014 年 12 月の解散総選挙の結果に日本の知識人が失望感を深く味わった，例えば言葉とか運動とかが社会を変えるという希望をほとんど失っている，そういう無力感に今さいなまれているんですね。社会学でも，今グランドセオリーはほとんど失効していて，今何に向かっているかというとマイクロ・ソシオロジーです，それも当事者研究という名の。当事者研究ってとても訳しにくいんですが，study on oneself by oneself，あるいは self-directed studies と翻訳されていますが，当事者研究は社会を救うよりも自分自身を救うというマイクロ・ソシオロジーのほうに行っています。もう一方で，グランドセオリーが失効したことに対するリアクションはとても強いです。例えば 1 年前に「20 世紀最後のマルクス主義者」と言われるアントニオ・ネグリが日本に来たんですが，そのときのネグリの日本における歓迎はものすごかったです。今年になってから 21 世紀のマルクス主義者と言われるトマ・ピケティという人の翻訳が出まして，この人はテクストが読まれる前から熱狂的に受け入れられています。一方でグランドセオリーに対する渇望と熱狂が，もう一方で知識人の無力感とマイクロ・スタディーズ指向とが裏腹に結びついているという危惧をとても強く感じました。キースの質問を受けて，なるほどねと思ったのは，アメリカはもっとオプティミスティックなんですってね。特にキースは今とっても楽天的なんだそうですね。（注：トランプ大統領以後のアメリカについてはどうでしょうか，聴いてみたいです。）

○**ヴィンセント**　この前，上野さんに言いましたけれども，テニュアを取りましたから，とても楽天的になりました。

○**上野**　ちゃんとカミングアウトゲイでもテニュアを取れるという，すばらしい自由な社会ですね，アメリカは。

○**ヴィンセント**　漱石と 2 人で，これから安全な，幸せな人生を……。

○**上野**　それがキースが最近ストラテジックになった理由ですか。

○**ヴィンセント**　ムードとか気分とかいえば，これは最後の質問なんですけれども，もっとあるかもしれないけれども，雰囲気，ムード，気分で私たちが研究していることが変わっていくと思います。私の，自分のキャリアというか人生を振り返ってみると，90 年代は非常にいつも怒っていた時代で，あと怖かった時代，エイズのために非常に怖かったし，研究する仕事というのは非常にせっぱ詰まった，必死なペースでやらなきゃいけないという感じがあって，論文を書くたびに政治的な重要性が非常に感じられて，ある意味ではそれはとてもスリリングだったんだけれども，長時間，何年もそれが続くと，やっぱりエネルギーがなくなるというか大変になるんですね。これは私，個人的な人生だけの話かもしれませんけれども。最近は少し新しい方法論を幾つか，きょうはクィア・セオリーの話なんですけれども，例えば認知科学を使った文学論とか，それこそサーファスリーディングという新しくできた読みの戦略とか，精神分析という，そういう人間の深い深い井戸の中にこもっている暗いところを発見するようなことのそのかわりに，もっと表面で現象を読むというような，これは曖昧なんですけれども，いろいろそういうような方法論ができているような気がします。それで集団的な気分が変わってきているような感じがします。これは私だけかもしれませんけれども，そういう感じがしてならない

です。私はそれを一種の開放的なこととして感じていて，もしかしたらこれで，これからの研究にとって非常にいいことかもしれませんけれども，もちろんそれは脱政治化とかそういう心配はありますけれども，でも逆にこれでもってもっと効果的に，政治的に動くことができるかもしれないという希望も一応持っております。

上野さんに聞きたかったんだけれども，日本の中で，もちろんムードが暗いとかさっきおっしゃっていたような，選挙の後では大変だと思いますけれども，学問の世界の中で方法論と気分というか。

○**上野**　キースさんは大変楽観的なことをおっしゃいましたが，キースさん，私は退職教授なんですよ。私の老後の安泰は，今，日本の政治状況によって打ち破られています。この年齢になって私は，かつてよりも怒りと絶望，失望感にさいなまれています。日本の状況は，ここまでの右傾化が進むとは想定外でした。夢にも思わなかったような状況が起きています。それはやっぱり日本全体が人口減少している，そして国民経済の規模が縮小しているということと切っても切れない関係にあります。アカデミックマーケットは高等教育という産業と直接関係があるんですが，アメリカの高等教育はグローバルマーケットを相手にしています。だから，グローバルマーケットが成長する間は，しかも英語化の動きが進んでいる間は，アメリカの高等教育が産業としてこれからもまだ成長を続ける余地がたくさんありますが，日本の国内の高等教育は国内市場が縮小していますので，しかもアジア圏では英語化が進んでいますから，この先余り希望が持てないということになっていくでしょう，それは日本研究全体の地位も下げていくことになるだろうし，日本の研究者は大きな希望を持てない状況になっています。社会学の分野でも，グランドセオリーは失効していて，小さいパラダイムが群雄割拠しながら，いずれも支配的な影響力を持てず，しかもますます研究が微視的になっていくという状況なので，私は今，明るい希望を語ることができません。中川さん，日本近代文学に未来はありますか。

○**中川**　それについては，またこれからのご発表を聞きながら希望をつないでいきたいと思うわけですけれども。

そんなことをいって，皆さんからもご意見を聴取しながら双方向的にやっていきたいと思いながら，時間の処理がうまくいきませんで，時間が来てしまいました。これで，この対談，終わりたいと思います。

それでは，お二人に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。（拍手）